

保育内容演習（言葉）における授業実践

—実習時の経験の授業への活用の試み—

村田 あゆみ

A Practical Study on Child Care and Education: Language —In Order to Utilize Students' Experience on Teaching Practice at a Preschool—

Ayumi MURATA

はじめに

平成29年3月に新しい幼稚園教育要領が告示された。第1章総則には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明示され、言葉の領域に関しては以下のように示されている。

（9）言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。¹

筆者が担当する授業「保育内容演習（言葉）」では、5領域の「言葉」の観点から子どもの発達や学びの過程をとらえ、子ども理解を深めながら保育内容について具体的に学んでいく。この領域がめざすのは、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う²」ことである。授業においては、子どもの言葉の発達の道筋や言語獲得の理論、言葉の育ちに関わる諸問題について学ぶ。授業で修得した知識や理論は、保育現場で実際に子どもが自分なりの言葉で表現したり、言葉の楽しさや美しさに気付く姿を見ることでより深い理解となる。

また、子どもの言葉を通して、子どもがどう人と関わり、人間関係を育んでいるのか、或いは言葉が発せられた時の心情や言葉のやりとりを通して発達していく姿をとらえることで子ども理解を深めていきたい。

さらに保育者には、日常的に家庭との連絡帳を書いたり、園便りを発行したり、保育日誌を書いたり、保護者と面談したり等の自分自身の言葉の運用能力が求められる。

受講する学生は2年生で初めての教育実習（幼稚園）を経験する。実習での経験や学びを教室での授業にいかんにか反映させ、どのように活用していくかということは、高度の専門性を持った保育士の育成に不可欠な課題である。そこで筆者は実習での観察、経験を授業に活用していく方法として、平成25年度より「ことばあつめ」ワークに取り組んでいる。これは、実習中に印象に残った子どもの生きた言葉を記録して授業に持ち帰り、背景などを考察してグループで討議ののち、報告集冊子（図1）を作成するというワークである。

筆者がこのワークを通して学生に求めるのは次の3点である。

- ①子どもが自分なりの言葉で表現する姿に気付く
- ②エピソード記録の作成を通して子ども理解を深める
- ③「園だより」等を想定した文章作成能力を修得する。

本稿では、このワークについての実践報告を行い、終了後に実施したアンケートの結果を踏まえ、上記の3点に関する学生の学びの成果について考察する。



図 1



1. 研究の方法（ワークの工程と内容）

保育内容演習（言葉）は、児童教育学科幼児保育学専攻2年次後期に演習科目（2単位）として配当されている。授業開始直後の10月～11月にかけて初めての実習である教育実習（幼稚園・4週間）が設定されており、授業はいったん中断、実習終了後再開する。この実習期間に、印象に残った子どもの言葉を記録しておき、実習後グループワークを開始する。

全15回の授業の第2回～第8回の各コマ90分の授業時間の後半45分程度をワークに充当する。今回報告する平成28年度の履修者は4クラス160名であった。

ワークの工程は次の通りである。

（第1回）

第2回 「ことばあつめ」の概要説明と実習中の課題の指示（図2）

実習中に遭遇した子どもの言葉の記録をしておく。実習の際の子ども観察の一環として、子どもの言葉に注目してみるとよい等の助言を行う。メモ書き程度でよいが、簡単な情報（例えば、兄弟関係、その子どもの性格等）も残すよう指示する。できれば複数の記録を取っておく。

第2回終了後 ＜教育実習（幼稚園）4週間＞

保育内容演習（言葉） 幼稚園実習中の課題について
『ことばあつめ』

自分の経験（言葉）で、子どもの言葉の発達をのぞいて「ことばあつめ」を行います。同時に自分の言葉の発達や観察を記録し、自分の言葉の発達をのぞいて「ことばあつめ」を行います。

例：子どもは来月より幼稚園生活に入ります。言葉もまだわからないから「ことばあつめ」にのぞいて「ことばあつめ」を行います。例：幼稚園の先生は、来月幼稚園から子どもを預かるようになります。

（この記録は「言葉」の授業に活用されます。実際に記録した子どものことばを記録しておいてください。記録は実習後最初の授業時に持参してください。）

年齢・性別・保育所	時間・場所・状況	子どものことば
年齢・性別・保育所	時間・場所・状況	子どものことば
年齢・性別・保育所	時間・場所・状況	子どものことば
年齢・性別・保育所	時間・場所・状況	子どものことば

図2 課題の指示（文面は右囲み参照）

幼稚園実習中の課題について「ことばあつめ」保育内容演習（言葉）では、子どもの言葉の発達そのほかについて学んでいきますが、同時に皆さん自身の体験や観察を理論と重ねあわせることが重要です。

幸い、皆さんは来月より幼稚園教育実習に出かけます。実習先で子どもたちのいろいろな「ことば」に出会ってくると思います。言い間違いや思い違い、大人とは異なる子どもの思考から出てきたことばなど、ほほえましいことば、ドキッとすることばを子どもたちの口から聞くことができるでしょう。この経験を「言葉」の授業に活かすために、実習で体験した子どもたちの言葉を記録しておいてください。記録は実習後最初の授業時に持参してください。（記録の項目は次の通り）

（記録の項目は次の通り）

歳児 男・女 簡単な情報があれば
時間帯・場所・状況など
子どものことば

第3回 グループワーク① 各自の「ことばあつめ」の記録を読みあい紹介し合う。

1グループは5～6人で構成する。図2で示した記録用紙をもとに、グループ内でそれぞれの記録を報告しあう。特に指示はしないで、学生同士の実習の思い出の交流会として自由に話し合わせる。グループ構成はランダムなので、必ずしも親しい者同士とは限らない。

第4回 グループワーク② ワークシートを作成する

各自の記録から1件を選定する。エピソード記録用のワークシートを使用し、各自の言葉の記録を「背景」「エピソード」「考察」にまとめる³。グループ内で相談しながら進めるよう助言する。次回までにワークシートを完成しておくよう指示する。

第5回 グループワーク③ エピソード記録をグループで読みあい、意見交換を行う。

1名分あたり5分の時間を設定し、エピソード記録を順に交換して、疑問点やコメント、誤字脱字のチェック等の添削を互に行う。一巡するとグループのメンバー全員が全てのワークシートに目を通すことになる。その後グループで総括的に討議を行う。清書用ワークシートを配布し、討議や添削を反映した清書を次回までの課題とする。

図3 ワークシート

第6回 グループワーク④ 報告集冊子用の原稿作成
エピソード記録の清書を提出。報告集原稿
(300字程度)に取り組む。原稿を書く際の注
意点として次のポイントを挙げる。

- ① 「園だより」等、保護者や第3者に読んで
もらうことを意識した文体を考える。
- ② 300字程度に収める。
- ③ はじめ—中—おわり を意識する。
- ④ (ワークシートで作成した)背景・エピソード・考察を取り入れる
- ⑤ 下書きをグループ内で読みあって文章を練り、完成原稿を作成する。



図4 グループワークの様子

第7回 グループワーク⑤ 印刷用グループ原稿の作成

各自の原稿をグループ単位でA3用紙にレイアウトし、カットも入れて見栄えよく
手に取ってもらえるような構成にする。各々の原稿にタイトルを付ける。表紙担当
者をクラスで1名選出する。次回までに各班でクラス人数+ α 分印刷をしておくよう指
示。

第8回 製本を行う

全員で製本し綴じる。

(第9回～第15回)

完成した報告集の文面は以下のようになった。

「透明人間ミッケ！」

H君は3歳の男の子。とても人懐っこい子で自分の担当クラスではありませんでしたが、よく一緒にあそんでいました。ある朝の自由遊びの時間、園庭でH君と遊んでいると、枯れ葉が木から落ちてきました。

それを見たH君は私に「先生、この枯れ葉はね、木から透明人間が落としているんだよ。僕、透明人間と話したこともあるんだよ」と嬉しそうに私に教えてくれました。

3歳児は様々な物事に興味・関心を持ち、人に聞いたり話したりするようになります。きっと誰かにH君は発見したことを伝えたかったのでしょうね。そんな新たな子どもの発見した時の気持ちに共感し、子どもと一緒に楽しむことができました。

「アンパンマン嫌い」

Aちゃんは4歳の女の子。自由遊びでは保育者や友達に積極的に遊ぼうと誘う社交的な子です。去年の年少組から年中組に学年が上がり、自分がお姉さんになったことを日頃意識し、誇らしく思っているようです。

ある日Aちゃんは保育者の身に付けているアンパンマンの名札に興味を示しました。ですが名札を見ると「アンパンマンは嫌い」と言うのです。「どうして？」と聞くと「アンパンマンは赤ちゃんが好きなものだもん。Aちゃんはお姉さんだからアンパンマン好きじゃないもん」と言いました。最初は「嫌い」という言葉に驚きましたが、自分がお姉さんだ！ということを伝えたかったのだと知り、とても可愛らしく感じました。

2. 事例の検討

エピソード記録から報告書の作成に至るまでの推移を事例を挙げて検討する。

【事例1】

（1）エピソード記録の作成

グループワーク②では、先述したように、集めてきた「ことば」をエピソード化する作業を行う。各自、その言葉が生まれた背景を考え（背景）、言葉の内容や状況を詳しく説明する（エピソード）。さらにそこからその言葉が持つ意味、子どもの心情、子どもの発達との関連などの考察を行う（考察）。身体や心理の発達段階等、わからないことがあれば図書館を利用して文献にあたってみるようにとの助言も行った。グループ内で相談しあったり、教員に質問や助言を求める姿も見られた。

（背景） 下線部、波線部は筆者

5歳児クラス 朝、当園後の自由遊びの時間 毎日ひとりでごっこ遊びをしている姿が見られた。変わった子で、一度自分の世界に入るとすごく集中して入り込んでしまうため、話しかけてもなかなか気付いてくれない。想像力が豊かである。

(エピソード)

朝、当園後の自由遊びの時間、私が他の子とトランプ遊びをしていると、Aくんが私の背後にやってきて、いきなり「じゃあ今日はこんな感じでいいですか？」と髪の毛を触ってきた。美容師ごっこをしているのだろう。「Aくん、何してるの？ 美容師さん？」と問いかけても返答がなく、Aくんは自分の美容師の世界に入り込んでいるようだった。美容師ごっこが終わると、今度は「では今から手術しますねー。ここに寝て下さーい」とお医者さんごっこを始めた。遊びの内容に応じて言葉づかいや口調を変え、役になりきっているようだった。

(考察)

Aくんは自分が実際に体験したり、見たり聞いたりしたことを遊びで真似し再現しているのだろう。

想像力、観察力、集中力が高い。

(2) 意見交換・添削

グループワーク③では各自作成したワークシートを順番に交換して添削を行ったうえ、質問や感想を含めた意見交換を行った。図5は、皆の意見が書き込まれたワークシートである。

(背景)の書き込みを見ても、下線部(変わった子)に対して、「色々な種類の「変わった子」がいるので詳しくふかめて書くと、いいかも」や「個性が強い子とかのがプラス

のイメージになるかも」というコメントが、波線部(話しかけてもなかなか気付いてくれない)には「気づいてくれない、などマイナスな風に聞こえるかもしれないので周りの話が耳に入らなくなるほど集中力があり、自分の世界をもっている などとかくといいいのかも」という助言などが書かれている。

(考察)の欄は、当該の学生はどう書けばよいかわからず、メモ書き程度であった。それに対して「美容師や医者に興味があるのでは?」「自分がなりたい、やってみたい、職業のごっこ遊びをしている?」「そんな子に対する援助をどのように行っていきたいかも書けるといいかも?」「どうして先生にその行動をしたのかを書くといいいかも。実習生に関わりたかった? みんなと違うことがしたかった」等のコメントや助言が書かれている。

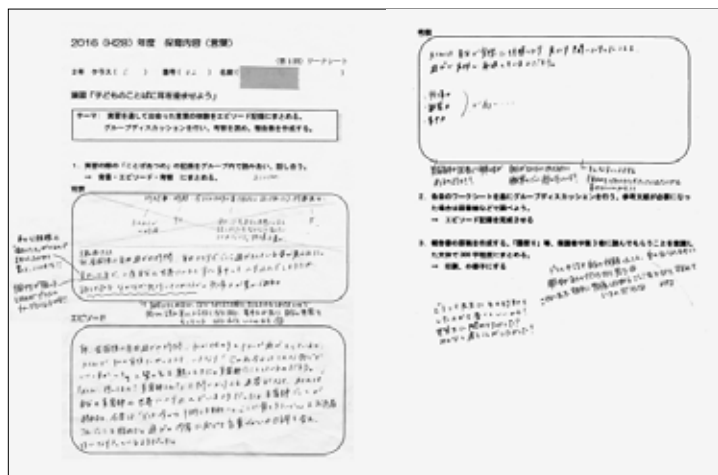


図5

（３）エピソード記録の完成

グループディスカッションを経て（背景）と（考察）は以下ようになった。

（背景）

５歳児クラス。朝、登園後の自由遊びの時間、毎日ひとりでごっこ遊びをしている姿が見られた。個性が強く、想像力が豊かな子で、一度自分の世界に入ると、とても集中して入り込んでしまうため、話しかけても気付かないほど集中し遊びにのめり込んでいる。

（考察）

Aくんは自分が絵本やテレビで見たもの、人から聞いたり自分が実際に体験したことを遊びで真似し、再現しているのだろう。

またAくんは自分がなりたい、やってみたい職業を遊びの中で真似ているのではないかと考える。

Aくんは身の回りのもの、人を見る観察力、経験したり見たりしたものを遊びに活かす想像力、そして一度自分の世界に入ると周りの声、音が耳に入らなくなるほどの集中力、これらの３つの力が高いのだと考える。

（４）報告書用原稿の作成

グループワーク④では完成したエピソード記録を元に報告集を作成する作業に入った。上記に挙げたポイントを示し、300字程度にまとめる。字数がわかるよう原稿用紙を配布した。書いた原稿は再び、交換して相互に添削し、誤字脱字、文法の誤り等のチェックをした。原稿にはタイトルも付けるよう指示した。

「いいっすか～？」

５歳児クラス。登園後の自由遊びの時間、毎日ひとりでごっこ遊びをしている姿が見られた。想像力が豊かで、一度自分の世界に入ると、周りの声も耳に入らなくなるほど集中している。

私が他の子とトランプ遊びをしていると、Aくんが背後にやってきて、「じゃあ、今日はこんな感じでいいっすかー？」と髪の毛を触ってきた。「Aくん、何してるの？ 美容師さん？」と問いかけても返答がなく、Aくんは自分の世界に入り込んでいるようだった。

Aくんは、周りの人の口調や様子を見る観察力や、自分が見たり聞いたりしたことを遊びに発展させる想像力、周りの声が聞こえなくなるほど、遊びに没頭する集中力が高いのだと考える。

（５）印刷用グループ原稿の作成

グループワーク⑤では完成した原稿を持ち寄り、グループに１枚ずつ配布したA３サイズの用紙に原稿をレイアウトし、カットを添えるなどしてページ作成を行った。これを各グループで印刷して次の時間に持ち寄り、最終回に全員で製本を行った。（図６）



図6

【事例2】

（1）エピソード記録の作成

（背景）

Mちゃんはおしゃべりが大好きであるがたまに制作活動で疲れたといいやる気が出ない時がある感情が豊かな3歳児である。

サンリオやディズニーが好きでカバンに付けるキーホルダーや髪を結ぶゴムなど色々な物にキャラクターを用いている。

実習2週目の頃の朝、教室で朝の支度を終えたMちゃんがこちらに来た。

（エピソード）

小走りで私のところに来たMちゃんが「先生見て！ これキキララ！」と言いながらキキララのティッシュを見せてくれた。私は「かわいいね、このキキララ」と言い直すと、「そうでしょ！ 私大好きなんだキラキラ！」と今度は最初とはまた別の言い方をした。

（考察）

小走りで来たため勢いがありしっかりと見えなかったと考える。また、キキララという言葉をしっかり覚えていないため雰囲気です話したのではないと思った。

（2）意見交換・添削

この事例では（考察）に対して次のようなコメントが寄せられた。

- *子ども自身では言えていると思っていて、「キキララ」が好きなことをただただ伝えたいと思った。
- *同じ文字が連続で出ているため幼児にとっては難しい言葉であると思った。
- *キキララを伝えたいけど、うろ覚えなのでうまく言えないのだと考えた。
- *同じ文字の連続は子どもにとって難しく簡単には言えないと思った。

（３）エピソード記録の完成

清書された考察は、３歳児の発音の発達段階に関するコメントを取り入れて、以下のようになった。

（考察）

小走りで来たため勢いがありしっかりと見えなかったと思う。
また、キキララという言葉をはっきりと覚えていないため雰囲気です話したのではないと思う。
「キキララ」という言葉は同じ文字が連続で出ているため３歳児のＭちゃんにとっては難しい言葉だと思った。

（４）報告集用原稿の作成

報告書の文面は以下のようになった。

「キラキラ」
Ｍちゃんはおしゃべりが大好きな３歳の女の子です。実習２週目の頃の朝、教室で朝の支度を終えたＭちゃんがこちらに来てキャラクターのティッシュを見せてくれました。
「先生見て！ これキキララ！」といったので、私が「キキララかわいいね！」と言い直すと、「そうでしょ！ 私大好きなんだキラキラ！」と今度はまた別の言い方をしていました。
小走りで来たため勢いがありしっかりと見えなかったのか、キキララという言葉をはっきりと覚えていないため雰囲気です話したのかと思いました。また、キキララという同じ文字が連続で出ている言葉は３歳のＭちゃんにとっては言いにくい言葉なのでは思いました。

３．アンケートによる本ワークの検証

（１）アンケート

最終授業日（第15回）に本ワークのアンケートを実施した。質問項目と選択肢は次の通りである。

１．幼稚園実習での「ことばあつめ」について

（１）「ことばあつめ」を実習の際に行うことは難しかったですか

①とても難しかった ②難しかった ③どちらともいえない ④あまり難しくなかつ ⑤全く難しくなかつた

①②の回答者：どんなところが難しかったですか（自由記述）

（２）「ことばあつめ」は実習の際、子ども理解に役立ちましたか

①とても役に立った ②役に立った ③どちらともいえない ④あまり役に立たなかつた ⑤全く役に立たなかつた

２．エピソード記録作成について

（１）グループでの話し合いは「背景」「エピソード」「考察」を書く際に役に立ちましたか

①とても役に立った ②役に立った ③どちらともいえない ④あまり役に立たなかつた

- ⑤全く役に立たなかった
- (2) エピソード記録を書くにあたり、難しいと思ったところはどこですか（自由記述）
- (3) エピソード記録を書いてみて、気づいたことはありますか（自由記述）
3. 報告集作成について（原稿作成・構成（レイアウト）・印刷）
- 報告集作成工程（原稿作成→構成（レイアウト）→印刷）において、最も難しいと思ったところはどこですか。それはなぜですか（自由記述）
4. グループワークについて（対象は本演習）
- (1) グループワークは効果的に進められたと思いますか
- ①大変効果的 ②効果的 ③どちらともいえない ④あまり効果的でない ⑤全く効果的でない
- (2) グループワークを行うにあたり、よかったところ、困ったところ等、自由に書いてください（自由記述）
5. 本演習全体についての感想を書いてください。

（2）結果と考察

結果は以下のようになった。

①「ことばあつめ」を実習の際に行うことについて（質問1（1））

表1 質問1（1）結果（人数及び割合）

①とても難しかった	②難しかった	③どちらともいえない	④あまり難しくなかった	⑤全く難しくなかった	合計
5	24	66	56	9	160
3.1%	15.0%	41.3%	35.0%	5.6%	

実習時の「ことばあつめ」に困難さを感じた学生（①②の合計）は18.1%であった。その理由としては、初めての実習で余裕がなかったことを挙げている学生が多かった。そのほか、行動ばかりに注目してしまい、子どものことばに耳を傾けることそのものを難しく感じる学生も少なからずあった。

②「ことばあつめ」が子ども理解に役にたったか（質問1（2））

表2 質問1（2）結果（人数及び割合）

①とても役にたった	②役に立った	③どちらともいえない	④あまり役に立たなかった	⑤全く役に立たなかった	合計
13	88	52	3	0	156
8.3%	56.4%	33.3%	1.9%	0.0%	

「ことばあつめ」が子ども理解に役に立ったかどうかについては、64.7%の学生が役に立ったと答えている（①②の合計）。役に立たないと感じた学生は1.9%にとどまった。清道は、実習日誌を書く際に学生が感じる困難として「子どもを観察する視点が分からない」を挙げる者が14.7%、「観察した事実から考えたことや気づいたことが思いつかない」を挙げる者が24.8%あったことを報告している⁴。「ことばに注目する」という課題は学生の子どもの観察の際の大きな助けとなったと考えられる。

③グループでの話し合いがエピソード記録作成の役に立ったか（質問2）

表3 質問2（1）結果（人数及び割合）

①とても役に立った	②役に立った	③どちらともいえない	④あまり役に立たなかった	⑤全く役に立たなかった	合計
15	88	46	11	0	160
9.4%	55.0%	28.8%	6.9%	0.0%	

次にエピソード記録の作成の際のグループワークの是非に関しては、64.4%が役に立ったと考えた（①②の合計）。役に立たなかったと感じた学生は6.9%で、この工程をグループワークとして取り組んだ成果があった。記録を書くにあたり、文章表現の力量の差が困難度と関連している様子が見られた。また、（考察）に困難を感じた学生も多く、一つのことを深く多方面から考え、それを文章で表現する過程の訓練が未熟であることが感じられた。提出された清書の（考察）は、言葉や子ども理解に関して表面的観念的で核心が捉えきれていないものも多く、考察への指導が今後の課題として浮き彫りになった。

一方、エピソード記録の作成を通しては、多くの学びがあったようである。書いてみることを通して、子どもの視点や考えに気づくことができた。2（3）の設問に対する自由記述を抜粋する（表記は原文ママ）。

- * 文にしてみても、子どもはこのときこんな気持ちだったのかなと気付くことができました。
- * 言葉で表すことによって、より子どものことを理解できた気がしました。
- * 子どもの視点に立って見つめなおすことができた。
- * 自分ではこういう意図だと思っていたけど、みんなの意見を聞くと新しい答えが返ってきたこと
- * 面白かったなと思って何気なく書いたエピソードでしたが、きちんと考察してみると、その子がたぶんこういう意図で行ったのだらうなと考えることができてよかったです。
- * 子どもって自分が思っていた以上に大人だった
- * おもしろいエピソードだなと思っていたけど、文字にするとなぜそうなったかなど考えられてよかった。
- * それを書くことでより子どもについて考えた。
- * 意外と子どもたちのことを見ていなかった
- * 子どもの何気ないつぶやきも、その子の考え方や何に注目しているかが伝わってくるんだなとわかった。
- * 子どもの一つのことで発達や子ども理解につながるのはすごいと思った。

④報告集作成工程において困難を感じたところ（質問3）

報告書作成については、自由記述で書いてもらった。その工程において難しいと感じた点について、300字の原稿にまとめる部分を挙げた学生が61名（38%）あった。規定の（短めの）字数でまとめる力、誰が読んでも簡潔でわかりやすい文章力が問われる。保育の現場では、連絡帳を書く、園だよりなどで活動の様子を紹介するなど、読みやすく生き生きと様子が伝わる文が求められる。

⑤グループワークが効果的に進められたか（質問4（1））

表4 質問4（1）（人数及び割合）

①大変効果的	効果的	③どちらでもない	④あまり効果的でない	⑤全く効果的でない	
10	109	37	4	0	160
6.3%	68.1%	23.1%	2.5%	0.0%	

本演習は、個別ではなく、グループワークを取り入れたが、その評価についても質問した。74.4%の学生が効果的に進められたと答え（①②の合計）、効果的でないと否定的な考えはわずか2.5%であった。これについては、よかったところ、困ったところを自由に書いてもらった。以下に回答を抜粋する（表記は原文ママ）。

- *自分以外の人意見を聞くことができる
- *自分では気づかなかったところを発見できる
- *たくさんのちがった意見があり、なるほどなと思ったり、どうしてそう考えるのだろうかと思ったり、自分の意見などをしっかり見直すことができた。
- *欠席する人がいると困る
- *あまり意見を言わない子がいる
- *授業外で集まらなければならなかったのが大変でした（授業だけでは時間が足りない）

よかったところとして、意見交換を通して、様々な異なる見方や考えを知り、視野が広がったことを挙げている学生が非常に多かった。それなりにグループ討議が成り立ち、学生自身もグループワークの意義を感じていたことがわかる。一方、困ったところとして挙げられたのは、欠席やグループワークに積極的に参加しない構成員がいることで作業が進まなかったこと、授業時間外の活動時間の確保が難しかった点である。グループワークが成立するには構成員の自発的な相互協力が不可欠である。それはまた一人一人の自覚に支えられている。また今回はグループ原稿の印刷に授業時間外の時間を費やす必要があった。様々な授業でグループワークは実施されており、今後も学生同士による共通の時間の捻出の工夫が求められる。

4. 結論とまとめ

このワークを通じての学生の学びの成果について以下に述べる。

- ①子どもが自分なりの言葉で表現する姿に気づく／②エピソード記録の作成を通して子ども理解を深める

学生が記録した言葉は、言い間違いや子どもの独自の世界観を反映した言葉から、周りを気遣うやさしい言葉まで多岐にわたる。学生自身がなぜその言葉を記録したいと思ったのか考えることからワークは開始する。またその言葉を生む前後関係や子どもの背景など、グループで互いに質問しあう中で、エピソード記録に必要な事項が見えてくる。グループで取り組む意味がここにあると考える。この作業を通して学生は、保育の現場で子どもの発する言葉に耳を傾けること、エピソード記録を作成する過程が子ども理解につながることを学んだ。学生のアンケートからも子どもの何気ない一言の後ろ側にある様々な思いに気付いた様子が伺える。またエピソード記録として一つのことばをグループワークを通して広く深く見つめなおすところか

ら子どもへの理解が深まった。アンケートの記述に「子どもって自分が思っている以上に大人だった」や「それを書くことでより子どもについて考えた」とあるように、子どもをしっかりと見つめる或いは見つめようとする眼が育まれたと思われる。また「意外と子どもたちのことを見ていなかった」のように、自らの気づきのあった学生も見られた。

③「園だより」等を想定した文章作成能力の育成

300字という限られた字数の中で、簡潔な言葉を用い論旨が明快で読みやすい文を書くという文章力を磨く機会であった。学生は自分自身の文章力の力量を知り、今後修得していかなければならない能力であることを自覚したようである。

「ことばあつめ」の記録用紙には一言あるいは1行程度しか書かれていなかった記述が、グループワークにおいて質問を受けたり意見の交換を通してエピソード記録となり、さらにそれが保護者などに読んでもらう文章へと進化をとげたことは大きな成果である。

5. おわりに（今後の課題）

「子どものことばに耳を澄ませる」という課題をもって実習に臨み、授業の中で考察を深める作業を通して子ども理解が深まった。また、グループワークを取り入れることで多様な視点から子どもを理解することができた。そしてそれらをレポート形式(エピソード)、「園だより」（報告書）といった異なる文体で記述する訓練ができたことが本ワークの成果である。同時にいくつかの課題も浮上した。

1点目は、グループワークの際、グループの構成員によってその質に差が生じたことである。アンケートには欠席者が出たために作業の中断を余儀なくされた等の不満が書かれていたが、グループワークの難しさや相互協力の重要性について学ぶ機会になったと思う。保育者にとって行事や日常業務の遂行等、日頃より相互の協力が不可欠である。グループワークは保育者としての資質が問われる演習であるともいえる。学生自身がこのグループワークの持つ意味に気づき、自覚を持って取り組んでいけるような指導が必要である。

もう一つの課題は質の問題である。エピソード記録の「考察」を考える際に文献の参照をすよう指導したが、実際に文献検索を行った学生はほとんど見られなかった。考察内容の質の向上に関する教員の適切な助言や指導が今後の課題である。

（注）及び参考文献

¹ 『幼稚園教育要領 平成29年告示』 フレーベル館、2017年、p.7

² 上掲書、p.19

³ 保育等の実践や場面の記録の方法論として、鯨岡峻はエピソード記述を提唱した。鯨岡はエピソード記述は「背景」「エピソード」「考察」の3項目で構成されるとしている。

（鯨岡峻『エピソード記述入門―実践と質的研究のために』東京大学出版会 2005年、鯨岡峻／鯨岡和子『保育のためのエピソード記述入門』ミネルヴァ書房 2007年）

⁴ 清道亜都子「保育実習日誌の記述における困難感の分析―学生へのアンケート調査をもとにして―」三重短期大学「生活科学研究会紀要」62号、2014年、p.27

